

北海道文教大学

グローバルコミュニケーション研究科

2018（H30）年度

# 自己点検・評価報告書

2019（R1）年11月20日

北海道文教大学

## 基準 1 理念・目的

点検・評価項目① 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

評価の視点 1 学部においては、学部、学科又は課程ごとに、研究科においては、研究科又は専攻ごとに設定する人材育成その他の教育研究上の目的の設定とその内容

評価の視点 2 大学の理念・目的と学部・研究科の目的の関連性

### 1) 建学の精神

『清正進実』（北海道文教大学・明清高等学校・附属幼稚園の建学の精神）

鶴岡学園の創設者鶴岡新太郎・トシ夫妻の遺された学訓『清く正しく雄々しく進め』を源に、1999（平成 11）年「北海道文教大学」開学へと建学の灯火は引き継がれてきた。その精神は今日も 4 本の柱として、学園に集う皆の心に刻まれている。

その 4 本の柱とは

- ① 真理を探究する清新な知性
- ② 正義に基づく誠実な倫理性
- ③ 未来を拓く進取の精神
- ④ 国民の生活の充実に寄与する実学の精神

我々はこれを要約し『清正進実』と呼び習わし、建学の精神としている。

### 2) 北海道文教大学の教育理念・目的

豊かな人間性を涵養するため幅広い知識を授けるとともに、理念と実践にわたり深く学術の教育と研究を行い、国際社会の一員として、世界の平和と人類の進歩に貢献し得る人材の育成を目的とする。

### 3) 北海道文教大学の教育目標

本学園の建学の精神および本学の教育理念の根底を成すのは「未来を拓くチャレンジ精神」である。本学ではこの「未来を拓くチャレンジ精神」の下、実学の創生、伝承の拠点として発展するために中・長期的な目標を以下のように定めている。

- ① 科学的研究に基づく実学の追求
- ② 充実した教養教育の確立
- ③ 国際性の涵養
- ④ 地域社会との連携

グローバルコミュニケーション研究科の教育理念と人材育成の目的

- ・本学の教育理念・目的に基づき、当研究科では言語と文化の専門教育を融合する教育により、地域社会と国際社会にとって有用な幅広い専門的知識と技術を養い、高度な言語運用能力と国際感覚を持ち、国際社会の中で主体的に行動できる人材を養成する。
- ・実践的で高度なコミュニケーション能力、専門的かつ幅広い知識、豊かな人間性を兼ね備えた指導的立場で活躍できる人材を養成する。

グローバルコミュニケーション研究科の教育目標は「高度な言語の理論研究を行う」ことと「高度な言語運用技術を身に付ける」ことであり、「実践的で高度なコミュニケーション能力、及び高度な言語文化に関する知識を持った専門的職業人の養成」と明示している。

本研究科言語文化コミュニケーション専攻の教育目標は、大学学部で身に付けた「日本語・中国語・英語の各言語コミュニケーション能力を基盤に、英語圏文化、中国語圏文化、日本文化を人文・社会科学的分野から研究していく。多様な文化交流を多元的視点から実践的・理論的手法で分析して理解を深めることにより、語学力と国際感覚を備えた国際社会において活躍できる人材、および英語・中国語・日本語の言語コミュニケーションの実践教育により知識と技術を身に付け、通訳・翻訳業務、言語教育等で活躍する高度な言語運用能力を備えた職業人を養成する」と明示している。

## (2) 長所・特色

本学外国語学部国際言語学科卒業後に継続して学べるよう、英語、中国語、日本語に関連した言語・文化・コミュニケーションの3領域を横断した研究も可能となっている。

## (3) 問題点

定員充足率に波があることから、安定した入学者数の確保を図る必要がある。外国語の通訳・翻訳の専門家を目指す入学者が減少し、外国語教育専門家職に就くことを希望している者が毎年確実に入学している。こうしたニーズを踏まえ、実践的言語教育を強化していく必要がある。

## 基準 4 教育課程・学習成果

### 点検・評価項目① 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

**評価の視点 1** 課程修了にあたって、学生が修得することが求められる知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果を明示した学位授与方針の適切な設定及び公表

グローバルコミュニケーション研究科言語文化コミュニケーション専攻のディプロマポリシーは

- ① 各領域が対象とする専門分野に関する専門的な知識および技能を修めている。
- ② 各領域の主要言語に関する高度な語学力・応用力などの言語運用能力を備えている。
- ③ 言語・文化に関する統合力を身につけ、国内外のさまざまなニーズに応えることができる。
- ④ 各領域の分野において研究した問題を論文にまとめ、発表できる能力を身につけている。

となっている。

学位授与の基準は学位規程第4条（修士の授与要件）に定められ、修業年限、学部・学科の卒業に必要な単位数は、大学院学則に明示されている。また、学位授与の判定は、ディプロマポリシーに基づき研究科委員会で審議を行ない議決している。

グローバルコミュニケーション研究科言語文化コミュニケーション専攻のディプロマポリシーは大学ホームページに公表しており、広く社会に公表されている。

教育課程などの諸事項は『大学院便覧』を作成し年度ごとに教職員および院生に配布することにより周知している。さらに「論文作成と提出までの流れ」のスケジュールを明示し、「修士論文の審査体制と認定・評価基準について」を明文化し、周知徹底している。また、それにもとづき、前期・後期のオリエンテーションにおいて詳細に説明しているだけでなく、学内掲示板をはじめ大学院生の演習室や研究室にも適宜その手続きと経過や結果等を掲示している。

学外に対しては、大学ホームページや「大学院募集要項」冊子等で公表している。

### 点検・評価項目② 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

**評価の視点 1** 下記内容を備えた教育課程の編成・実施方針の設定及び公表

- ・教育課程の体系、教育内容
- ・教育課程を構成する授業科目区分、授業形態等

**評価の視点 2** 教育課程の編成・実施方針と学位授与方針との適切な関連性

グローバルコミュニケーション研究科言語文化コミュニケーション専攻のカリキュラムポリシー（CP）は次のように定められている。

1. 学部で学んだ教育内容を基礎として、さらに国際社会に通用する高度な専門的知識と技能を得るためのカリキュラムが展開されている。
2. 実践的な言語の運用能力を身につけるために、言語に関するコミュニケーション能力養成のための翻訳、実践演習等の科目が配置されている。
3. 社会の国際化という変化に対応できる専門性と持続性を考慮し、専門的な知識、豊かで幅広い教養、コミュニケーション能力などを培うためのカリキュラムが配置されている。
4. 論文作成のための特別な科目を設け、論文完成までの丁寧な個別の研究体制を整えている。

カリキュラムポリシーに基づき「共通科目」、「英語・英米言語文化コミュニケーション領域」「中国語・中国文化コミュニケーション領域」「日本語・日本文化コミュニケーション領域」、の3つの領域の科目群を配置している。

科目は講義科目と演習科目がバランスよく配置され、院生の学びを効果的に実践できるように配慮されている。また、共通科目と3言語・文化領域からそれぞれの院生が必要な科目を履修したのち、「特別課題研究Ⅰ」「特別課題研究Ⅱ」（修士論文）に集中出来るように配慮されている。

グローバルコミュニケーション研究科言語文化コミュニケーション専攻のカリキュラムポリシーは以下の表のようにディプロマポリシーに対応しており整合している。

教育課程の編成・実施方針(カリキュラムポリシー)	学位授与方針 (ディプロマポリシー)
1. 学部で学んだ教育内容を基礎として、さらに国際社会に通用する高度な専門的知識と技能を得るためのカリキュラムが展開されている。	① 各領域が対象とする専門分野に関する専門的な知識および技能を修めている。
2. 実践的な言語の運用能力を身につけるために、言語に関するコミュニケーション能力養成のための翻訳、実践演習等の科目が配置されている。	② 各領域の主要言語に関する高度な語学力・応用力などの言語運用能力を備えている。
3. 社会の国際化という変化に対応できる専門性と持続性を考慮し、専門的な知識、豊かで幅広い教養、コミュニケーション能力などを培うためのカリキュラムが配置されている。	③ 言語・文化に関する総合力を身につけ、国内外のさまざまなニーズに応えることができる。
4. 論文作成のための特別な科目を設け、論文完成までの丁寧な個別の研究体制を整えている。	④ 各領域の分野において研究した問題を論文にまとめ、発表できる能力を身につけている。

グローバルコミュニケーション研究科言語文化コミュニケーション専攻のカリキュラムポリシーは大学ホームページに公表しており、広く社会に公表されている。

### 点検・評価項目③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわ

## しい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

### 評価の視点1 各学部・研究科において適切に教育課程を編成するための措置

- ・教育課程の編成・実施方針と教育課程の整合性
- ・教育課程の編成にあたっての順次性及び体系性への配慮
- ・単位制度の趣旨に沿った単位の設定
- ・個々の授業科目の内容及び方法
- ・授業科目の位置づけ（必修、選択等）
- ・各学位課程にふさわしい教育内容の設定
  - <学士課程>初年次教育、高大接続への配慮、教養教育と専門教育の適切な配置等
  - <修士課程>コースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育への配慮等

### 評価の視点2 学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育の適切な実施

グローバルコミュニケーション研究科では、「言語・文化・コミュニケーション」の三位一体の教育・研究を目指す「言語文化コミュニケーション専攻」を設けている。

カリキュラムポリシーにもとづき、教育内容は「共通科目」、「英語・英米文化コミュニケーション領域」「中国語・中国文化コミュニケーション領域」「日本語・日本文化コミュニケーション領域」が設定され、専門分野の応用・発展につながる教育内容を提供している。「共通科目」は地域社会と国際社会にとって有用な幅広い高度な専門知識と技術、確かな国際感覚を養う科目が設定されている。「英語・英米言語文化コミュニケーション領域」「中国語・中国文化コミュニケーション領域」「日本語・日本文化コミュニケーション領域」は、それぞれの言語における言語コミュニケーションの実践教育により、通訳・翻訳業務、言語教育等で活躍できる高度な言語運用能力を育成する科目が設定されている。

また、「共通科目」の中の「特別課題研究Ⅰ・Ⅱ」の科目において修士論文の研究を完成させている。

授業科目は必修科目（6単位）・選択必修科目（4単位）・選択科目（72単位）の合計82単位で構成している。

英語や中国文化など、一つの言語文化のみで専門性を極めたい院生のために、各領域（「英語・英米文化コミュニケーション領域」「中国語・中国文化コミュニケーション領域」「日本語・日本文化コミュニケーション領域」）だけで選択科目を20単位ずつ配置し、専門のリサーチワークにつながるようにしている。

科目は講義科目と演習科目がバランスよく配置され、院生の「学び」を効果的に実践できるように配慮されている。また、共通科目の他に、3つの言語・文化コミュニケーション領域から、それぞれの院生が必要な科目を履修したのち、「特別課題研究Ⅰ」「特別課題

研究Ⅱ」(修士論文)に集中出来るように配慮されている。

コースワークについては、通常、初年度の1年間で大半が終了し、2年目から研究計画に従いながら実質的な研究を行う。したがって、コースワークで基礎力を養い、リサーチワークで実践力を培いながら、修士論文の研究を完成させる方式となっておりバランスの良い履修ができるよう配慮している。

#### 点検・評価項目④ 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

**評価の視点1** 各学部・研究科において授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための措置

各学位課程の特性に応じた単位の実質化を図るための措置(1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定等)

シラバスの内容(授業の目的、到達目標、学習成果の指標、授業内容及び方法、授業計画、授業準備のための指示、成績評価方法及び基準等の明示)及び実施(授業内容とシラバスとの整合性の確保等)

学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法

<修士課程>

研究指導計画(研究指導の内容及び方法、年間スケジュール)の明示とそれに基づく研究指導の実施

大学の全学部および全研究科においてシラバス中の「授業の方法」において、①プレゼンテーションの方法、②授業形態、の他に③アクティブラーニングの取り入れの状況を記述するようになっている。また、2018年度から「課題に対するフィードバックの方法」欄が独立した項目となりフィードバックを学生に返すことにより学生が意欲をもてるように配慮している。

グローバルコミュニケーション研究科において主体的参加の授業となっているかどうかについては、募集人員が5名であるため少人数のゼミ方式が主であり、必然的に院生の主体的な参加型授業となっている。

グローバルコミュニケーション研究科のカリキュラムポリシーに従って教育方法は以下のようにになっている。

共通科目においては、1年次前期に異文化・国際関係等の理論とその変遷に関する講義があり、それ以後は演習科目を配置しており、順次性を考えて配置されている。英語・英米文化コミュニケーション領域では、英語学と翻訳技術理論に関する講義が1年前期にあり、それ以外は演習科目となっている。同様に、日本語・日本文化コミュニケーション領域でも、日本語学および言語学と日本語教育学の講義が1年次前期にあり、それ以外は演習科目となっている。中国語・中国文化コミュニケーション領域ではすべて演習となって

いる。

授業科目の科目区分、必修・選択の別、単位数、配当年次及び学期は大学院便覧に明示している。

学生は、入学時の研究計画書およびその後の指導に基づいて、1年次後期にそれぞれの指導教員を決定し、2年次4月に研究計画書を再提出する。これを基にして研究指導および修士論文作成指導を行い、修士論文を作成する、というスケジュールにしたがって論文を完成させている。

### 点検・評価項目⑤ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

#### 評価の視点1 成績評価及び単位認定を適切に行うための措置

- ・単位制度の趣旨に基づく単位認定
- ・既修得単位の適切な認定
- ・成績評価の客観性、厳格性を担保するための措置
- ・卒業・修了要件の明示

#### 評価の視点2 学位授与を適切に行うための措置

- ・学位論文審査がある場合、学位論文審査基準の明示
- ・学位審査及び修了認定の客観性及び厳格性を確保するための措置
- ・学位授与に係る責任体制及び手続の明示
- ・適切な学位授与

グローバルコミュニケーション研究科の成績評価は以下の「大学全体の成績評価の方法・基準」で示した評価の方法・基準に沿って成績を評価している。また、シラバスに各教科について毎回の準備学習と事後学習を明示し、単位の実質化をはかっている。

#### 【大学全体の成績評価の方法・基準】

成績評価は本学の履修規程に基づき、各教員が事前にシラバス上で学生に公表した評価方法によって成績評価と単位認定を行っている。全学において授業科目の成績評価は、100点満点の60点以上を合格とし、AA(秀)(90点以上)、A(優)(80点以上90点未満)、B(良)(70点以上80点未満)、C(可)(60点以上70点未満)となっている。

定期試験期間中、病欠、公欠等の理由で受験できなかった場合に追試験を課している。

履修した科目の成績が合格となった場合は、定められた単位数を履修者に与えている。なお、成績評価に疑義のある場合は、文書による疑義申し立てと担当教員からの文書による回答をすることを制度化し、学生と教員が相互に成績評価の適正性を確認している。

授業科目は、「講義」、「演習」、「実習・実技」に大別されており、1単位を修するための時間は以下の表のようになっている。よって、いずれも1単位の授業科目に45時



間の学修を標準とする大学設置基準の主旨に従っている。なお、本学では授業1回90分を2時間と計算する。2単位の講義形式の授業科目であれば15回で授業時間が30時間、したがって自習時間は1回4時間×15回=60時間が必要となると指導している。学生の予習・復習時間を確保するため、シラバスには毎回の授業ごとに準備学習と事後学習の項目を設けて学生が自習時間にすべきことをきめ細かく指示し、単位の実質化をはかっている。

授業形態	授業時間	自習時間	計
講義	15時間	30時間	45時間
演習	30～15時間	15～30時間	
実習・実技	45～30時間	0～15時間	

グローバルコミュニケーション研究科では、成績評価はレポートをはじめディスカッションペーパーや試験を重視している。合わせて授業時間における発表や討論などの内容についてもこれを評価に加味し、これらすべてを厳しく点数化（%でも表記）し、適切に単位の認定を行っている。

グローバルコミュニケーション研究科の修士学位授与の判定については、ディプロマポリシーに則り、修士論文の審査結果、取得単位に関する学生の成績情報などに基づいて、研究科委員会の議を経て決定しており、適切に行われている。

各研究科の修了の要件については、各年度に配布される大学院便覧の別表「授業科目及びその配当年次・単位数」において学生に明示している。

グローバルコミュニケーション研究科においては、論文指導教員と学位論文審査教員を分離し、指導は複数の指導教員制をとっている。従って、学位審査および修了認定の客観性・厳格性が確保されている。

**点検・評価項目⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。**

**評価の視点1** 各学位課程の分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定

**評価の視点2** 学習成果を把握及び評価するための方法の開発

《学習成果の測定方法例》・アセスメント・テスト・ルーブリックを活用した測定・学習成果の測定を目的とした学生調査・卒業生、就職先への意見聴取

グローバルコミュニケーション研究科においては、学生の学習成果を測定するための指

標である GPA (Grade Point Average) は、平成 28 年度後期および平成 29 年度前期において全学生が良以上に相当する 2 以上となっており、成果が上がっている。

なお、学生の自己評価、修了時の評価を調査する組織的な取り組みとして、平成 29 年度修了生 (平成 30 年 3 月修了) を対象に「修士課程教育修了時アンケート」を実施した。

**点検・評価項目⑦ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。**

**評価の視点 1** 適切な根拠 (資料、情報) に基づく点検・評価

・学習成果の測定結果の適切な活用

**評価の視点 2** 点検・評価結果に基づく改善・向上

教育課程及びその内容、方法の適切性は研究科委員会で検討される。

グローバルコミュニケーション研究科では、平成 27 年度にカリキュラムの改訂を行い、授業内容の専門性を高めるために隔年開講を実施し、開設授業科目数を増加させた。これらのカリキュラム改訂は、院生と教職員の意見を聞いて検証し、研究科委員会で検討した。さらに外国語学部国際言語学科の英語を中心とするカリキュラム改訂に対応して、平成 30 年度には英語・英米文化に関する研究志望者のためにカリキュラムを追加改編し、現在の 3 言語領域に改正した。

グローバルコミュニケーション研究科において、もっとも明確な教育的成果の一つは修士論文である。より良い論文を作成するために、「特別課題研究Ⅰ」「特別課題研究Ⅱ」において、それぞれ担当する教員が指導に当たり、その成果は前期と後期に研究科委員会において検証を行うようになっている。個々の検証で浮かび上がる問題点にもとづき、シラバスの改正、領域の検討、教育内容や方法等の改善に結びつけられている。

## (2) 長所・特色

修士論文の指導教員・副指導教員以外にも、分野の異なる教員からも研究方法のアドバイスや論文チェックが受けられるため、修士論文執筆前から完成までの丁寧な指導が受けられる。

## (3) 問題点

特になし。

## 基準5 学生の受け入れ

### 点検・評価項目①学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

**評価の視点1** 学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を踏まえた学生の受け入れ方針の適切な設定及び公表

**評価の視点2** 下記内容を踏まえた学生の受け入れ方針の設定

- ・入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像
- ・入学希望者に求める水準等の判定方法

各研究科のアドミッション・ポリシーは大学院ホームページ（資料 大学院募集要項2016）及び「募集要項」で公表し、1.教育目的または、教育研究上の理念と目的 2. アドミッション・ポリシーを明記している。なお、障がいのある学生の受け入れについては、基本的に大学全体と同じである。

#### 【グローバルコミュニケーション研究科アドミッション・ポリシー(求める学生像)】

本課程は、カリキュラムポリシーで明らかなように、言語を中心にすえて、国際社会で活躍できる高度な専門知識をもった職業人の育成を目指し、国際社会の理解に必要な知識・技能を積極的に吸収しようとする向上心にあふれた研究意欲のある学生を求めている。

1. 学部で修得した言語・文化に関する十分な基礎学力を有し、高度な言語運用能力を身につけ、さらに高度な「言語・文化・コミュニケーション」を専門的に学び研究したい人。
2. 異文化圏に関心を持ち、異文化を理解するに当たって柔軟で創造的な思考ができる人。
3. 幅広い知識と教養を身につけ、高度な言語運用能力を高め、活躍したいと望んでいる人。
4. 国内外の研究活動を通じて、さらに視野を広めて言語と文化に対する感性を磨き、修了後は翻訳や通訳などに従事する専門的職業人として国内外で活躍したいと望んでいる人。グローバルコミュニケーション研究科におけるアドミッション・ポリシーは以下の表のように、カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに対応しており整合している。

学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）	教育課程の編成・実施方針（カリキュラムポリシー）	学位授与方針（ディプロマポリシー）
1. 学部で習得した言語・文化に関する十分な基礎学力を有し、高度な言語運用能力を身につけ、さらに高度な「言語・文化・コミュニケーション」を専門的に研究したい人。	1. 学部で学んだ教育内容を基礎として、さらに国際社会に通用する高度な専門的知識と技能を得るためのカリキュラムが展開されている。	① 各領域が対象とする専門分野に関する専門的な知識および技能を修めている。

2. 異文化圏に関心を持ち、異文化を理解するに当たって柔軟で創造的な思考ができる人。	3. 社会の国際化という変化に対応できる専門性と持続性を考慮し、専門的な知識、豊かで幅広い教養、コミュニケーション能力などを培うためのカリキュラムが配置されている。	③ 言語・文化に関する総合力を身につけ、国内外のさまざまなニーズに応えることができる。
3. 幅広い知識と教養を身につけ、高度な言語運用能力を高め、活躍したいと望んでいる人。	2. 実践的な言語の運用能力を身につけるために、言語に関するコミュニケーション能力養成のための翻訳、実践演習等の科目が配置されている。	② 各領域の主要言語に関する高度な語学力・応用力などの言語運用能力を備えている。
4の前半. 国内外の研究活動を通じて、さらに視野を広めて言語と文化に対する感性を磨き、		
4の後半. 修了後は翻訳や通訳などに従事する専門的職業人として国内外で活躍したいと望んでいる人。	4. 論文作成のための特別な科目を設け、論文完成までの丁寧な個別の研究体制を整えている。	④ 各領域の分野において研究した問題を論文にまとめ、発表できる能力を身につけている。

**点検・評価項目②学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。**

評価の視点1	学生の受け入れ方針に基づく学生募集方法及び入学者選抜制度の適切な設定
評価の視点2	入試委員会等、責任所在を明確にした入学者選抜実施のための体制の適切な整備
評価の視点3	公正な入学者選抜の実施
評価の視点4	入学を希望する者への合理的な配慮に基づく公平な入学者選抜の実施

各研究科共に志願者の募集は、研究科の理念と教育目的、AP、カリキュラム、募集要項を盛り込んだ「募集要項」リーフレットの公表配布及びホームページで公開している。入学者選抜は、研究科担当全教員があたり、筆記試験・口述試験の実施・採点は、複数の教員で行い、研究科会議の可否判定会議を経て、入試委員会で審議し合格者を決定している。

**点検・評価項目③適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。**

**評価の視点1 入学定員及び収容定員の適切な設定と在籍学生数の管理**

< 修士課程 >

・収容定員に対する在籍学生数比率

大学院グローバルコミュニケーション研究科は、入学定員5名、収容定員10名の極めて小規模の修士課程である。なお、各研究科過去5年の入学者及び入学定員に対する比率は下表のとおりである。

**【大学院研究科入学定員に対する入学者比率（過去5年間平均）】**

研究科	入学定員	入学者数					入学者数	入学比率 平均値
		2014	2015	2016	2017	2018		
グローバルコミュニケーション研究科	5	4	6	1	7	4	22	0.88

グローバルコミュニケーション研究科は入学者比率の平均値が0.88で、入学定員未充足の状態にある。年により入学者の変動が大きいのが要因と考えられ、安定的な募集活動が強く求められ、是正が必要である。

また、大学院の収容定員に対する在籍比率は、以下のとおりである。

**【2018年度大学院の在籍学生数と収容定員に対する在籍学生比率（2018.5.1日現在）】**

研究科	収容定員 (A)	年次別在籍学生数		在籍学生数 (B)	在籍学生比率 B/A
		1年次	2年次		
グローバルコミュニケーション研究科	10	5	6	11	110%

在籍学生比率は、グローバルコミュニケーション研究科は1.10と収容定員を満たしているが、安定した学生募集を維持継続する必要がある。

**(2) 長所・特色**

大学院全体で情報の共有化が図られる中、研究科としての研究体制整備や指導体制など、より本格化した体制作りを志向しつつある。今後さらに情報の共有化と体制整備をはかり、切磋琢磨しながら大学各学部の研究・教育を牽引する大学院として発展することを全教員が課している。

### (3) 問題点

学生募集については、教育研究内容及びその指導内容から担当教員が中心にならざるを得ない。しかし、学修意欲や質の高い入学者をこれまで以上に確保するためには、志願者の増加を図ることが前提となる。大学院4研究科が組織的に研究・指導体制や情報の共有化、学生募集の恒常化について改善が必要である。

## 基準6 教員・教員組織

点検・評価項目④ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげているか。

### 評価の視点1 ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動の組織的な実施

グローバルコミュニケーション研究科では研究科のFDセミナーが以下のように実施された。

グローバルコミュニケーション研究科 FD 研修会

日時：平成30年7月11日（水）13：30～15：00

場所：GC 研究科大学院生室

対象：GC 研究科教員

題目：授業準備の中から専門論文の構想を得る

講師：佐藤進氏（本学 GC 研究科教授）

出席者：GC 研究科全教員9名

グローバルコミュニケーション研究科 2018年度第2回 FD 研修会

日時：平成30年11月14日（水）13：30～14：50

場所：本館10階 会議室

題名：「翻訳技法再考—聖書とユダヤの歴史的解釈からトスカール作品まで—」

講師：Stephen Toskar 教授（本学 GC 研究科教員）

出席：GC 研究科教員8名

第1回のFD研修会では、授業から院生の専門研究へ、知的刺激をどう提供するか、また教員自身がどのように研究構想をはかって研究成果が得られるか等が講師の事例とともに講演された。

第2回のFD研修会では、誤訳が生まれやすい翻訳をどう指導していくかについて、背景知識の必要な宗教書（英語原本）を翻訳事例として、翻訳とはどうあるべきかを再考し、その原著の隠れた背景をどこまで補足翻訳する必要があるかを演習した。

## （2）長所・特色

研究分野の異なる講師の講演や研究・教育実践は、多様な教育・研究手法や異なった視点などの刺激を受け、各自の研究指導に応用できる。

## （3）問題点

全教員が学部兼任であることから、学部業務を優先対応する必要があるため、全教員が参加できる研修日程を年度始め前等の早い時期に計画することが難しい。

大学院グローバルコミュニケーション研究科 自己点検評価実施委員

役名	名 前		
委員長	教授	岡本 佐智子	グローバルコミュニケーション研究科長
委員	教授	高橋 保夫	外国語学部国際言語学科長
委員	教授	小西 正人	自己点検・評価専門部会員 (グローバルコミュニケーション研究科)